

建築要素の慣習性に関する考察および設計提案



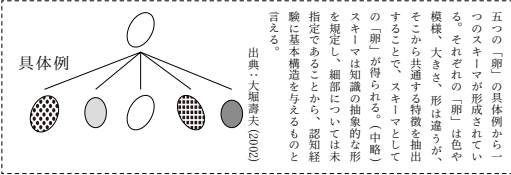
2 慣習性の概念について

本章においては慣習性の構造を認知科学、文学の視点より捉えるとともに、ロシアフォルムリズム等の指摘から慣習性からの逸脱について考察する。

2-1 慣習性の構造

2-1-1 スキーマ・コード概念

ある慣習化した物事と人間の認知活動はスキーマ・コード概念と関連付けられる。スキーマとは様々な事象を理解する枠組みとなる、構造化された知識の集合のことである。これは具体例の比較によって一般化、抽象化されて獲得されるものであり、経験を通じて常に更新される動的なものである。つまりスキーマを得ると、認知活動がよりスムーズに行われるようになり、個々の対象への無意識化へと繋がると考えられる。またコード概念は個人単位のスキーマがある社会単位において一般化したものである。



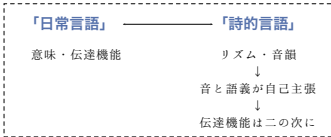
2-1-2 コンテキスト概念

コンテキストは文や語の論理的関係性の他、背景や状況といった意味で用いられる。この概念は、語の意味は文という関係性の中において考えられるべきだとするゴットロープ・フレーゲの「文脈原理」に始まり、テクストが発せられた状況を考慮すべきだとするプロニスラウ・マリノフスキーの「場面のコンテキスト」、当事者の文化的・社会的背景を考慮すべきだとする「文化のコンテキスト」へと展開する。前者は「言語的コンテキスト」、後二者は「非言語的コンテキスト」として整理されるが、いずれも語の意味はそれ単体においては決定されないということであり、ある物事の慣習性はそのコンテキストにも影響を受けるということである。

2-2 慣習性からの逸脱の構造

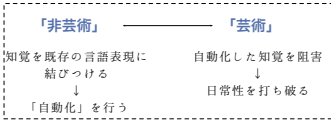
2-2-1 詩的言語

「詩的言語」とはロシア・フォルムリズムの中心概念であり、主に意味・伝達機能を持つ「日常言語」に対して、日常的な意味から逸脱し、文学性を持つ、それ自体で価値を持つものであると考えられた。つまり、慣習的なものに対して、慣習的ではないものが存在するという指摘である。



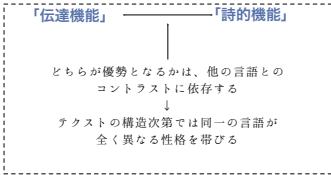
2-2-2 異化作用

「異化作用」とはグイクトル・シクフスキーが提唱した、ある物事を日常的な連関から外すことにより、見慣れたものが奇異なものとして捉えられることである。「非芸術」が知覚を既存の表現に結びつけ「自動化」を行うのに対し、異化作用を生む「芸術」は日常における知覚の自動化を阻害するとして、日常性を打ち破る。



2-2-3 美的機能

ヤン・ムカジフスキーは「詩的言語」の存在を否定し、言語それぞれに「詩的機能」や「伝達機能」など様々な機能が備わっていることを指摘した。どの機能が優勢となるかは、他の言語との対比によるとし、コンテキスト次第では同一の言語が全く異なる性格を帯びることを指摘し。



1 序論

1-1 研究の背景と目的

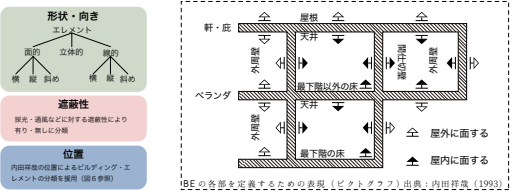
建築の全体は様々な要素が組み合わされて成立している。この要素の捉え方には様々なものがあるが、その一つとして「壁」や「屋根」など、建築を物理的な構成要素の集合とするものがある。この物理的な構成要素である「エレメント」は長い時間をかけ、文化的、社会的な要因、環境への対応などにより形成され、豊かな背景を有している。しかし我々が建築や都市を経験する際、逐一それを構成するエレメントに意識を向けることは少ない。逆説的ではあるが豊かな背景を有するにもかかわらず、日常にありふれたものとなったため、慣習化され意識されない存在となっているのである。つまりこのエレメントに対する無意識化、意識の自動化を回避することにより、エレメントが有する様々な背景に対して目を向けることができる。この視点は新しい空間体験を生み出す可能性を有しており、建築を設計する上で有用な視点であるといえる。そこで本研究では建築をエレメントに着目し、エレメントへの無意識化、意識の自動化を回避する一つの方法として、エレメン

3 エレメントの慣習性について

本章においては第2章における慣習性の概念の整理に基づき、エレメントにおける慣習性とそこからの逸脱について考察する。

3-1 エレメントの分類

第2章において整理した慣習性の概念を参照し、エレメントが持つ抽象的な特徴である「形状」、「向き」、「遮蔽性」、「位置」を、「分類のスキーマ」として設定した。このスキーマを参照することによりエレメントを見分けることができる。この分類により、「柱」「梁」「壁」「開口部」「屋根」「天井」「床」「階段・スロープ」「基礎」の9つのエレメントと、付加的な要素として「設備」と「家具」の2つのエレメントを本研究における分析対象とした。



形態分類	向き	遮蔽性	位置	エレメント	面	表面	機能性・意味性
線的	縦	無し	一	柱			構造
	横	無し	一	梁			構造
面的	縦・斜め	有り		壁	外周壁 内周壁 内壁 屋外壁	内面壁 外面壁	構造・領域形成・環境調整
	縦・横・斜め	透過	ビクトグラム参照	開口部	開口 戸・扉		領域形成・環境調整・通路
	横・斜め	有り		屋根	陸屋根 勾配屋根 庇		領域形成・環境調整
	横・斜め	有り		天井		屋内天井 屋外天井	領域形成
	横・斜め	有り		床		屋内床 屋上	領域形成・通路
	斜め	有り		階段			通路
	横	有り		基礎			構造
立体	斜め	有り					
	横	有り					

トが持つ慣習性からの逸脱に着目する。そこから得られた視点を元に建築作品を分析し、具体的な手法を得る。さらに、得られた手法を元に設計提案を行うことにより、本研究の有用性を示す。

1-2 語義の定義

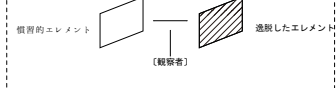
建築の物理的な構成要素は、どのまとまりを一単位とするのかという問題があるが、本研究においては「壁」や「屋根」などを対象とし、これらを「エレメント」とする。これは内田祥哉らが提唱した、空間を仕切る要素としてのビルディングエレメントに相当するものである。この分類等については第3章において詳述する。

また、「慣習」とはある社会集団において広く一般化した決まりごとのことである。本論における「建築エレメントの慣習性」とは第2章で詳述するように、ある社会において広く一般化し、固定化した建築エレメントのあり様のことである。

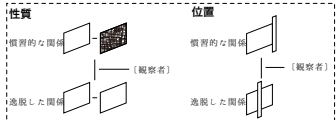
3-2 エレメントにおける慣習性からの逸脱

第2章において整理した慣習性からの逸脱概念を建築エレメントに援用し、3つの「逸脱の型」を得た。

「慣習的性質からの逸脱」は文化的・社会的な背景のもと形成されてきたエレメントを「文化のコンテキスト」に沿ったエレメントであるとし、そこから性質が逸脱する型である。ある単体のエレメントを認知した時、その抽象的特徴からスキーマが要請され、特定のエレメントがイメージされるが、このイメージされた性質と実際のエレメントの性質に差異がある場合に逸脱が認識される。更にエレメントの性質的な変化への視点として、形状の変化に着目する「形状」、材や色などに着目する「素材」、材の位置関係に着目する「組成」の3つの分析視点を設定した。



「慣習的相対関係からの逸脱」は「言語的コンテキスト」が言語の意味はその隣接関係に依存することを指摘したように、エレメント同士の相対関係が変化することにより、慣習性からの逸脱が起きる型であり、エレメントの相対関係への視点として、形状や素材などの相対関係に着目する「性質」、位置関係に着目する「位置」の2つの分析視点を設定した。



「慣習的全体性からの逸脱」は建築の全体をひとつのコンテキストとみなすことにより、そこに配置されるエレメントとの関係により逸脱が起こる型であり、全体とエレメントが有する性質に着目する「性質」、エレメントの全体に対する位置に着目する「位置」の二つの分析視点を設定した。



本章においては前章において設定した3つの型を元に、『新建築住宅特集』を対象とした作品分析を行う。
さらに「逸脱の手法」として類型化を行う。

4-1 分析方法

第3章にて設定した3つの型を元に、慣習性からの逸脱がどのように行われているかを考察する。エレメントに対する繊細な操作に着目するため、対象は住宅作品とし、新建築住宅特集の過去10年分を対象として約120事例の分析を行った。

4-3 各手法の考察

4-3-1 「慣習的性質からの逸脱」

「A.遮蔽性の変化」はエレメントの遮蔽の度合いが通常より変化する手法である。素材が透過性のあるものに交換される「A-1素材の透明化」と、部材が切断されることにより遮蔽性が変化する「A-2部材の欠損」に分類できた。「B.組成現し」は通常隠される組成が現しとなる手法である。表面材が削除される「B-1.表面材の削除」と、面が切断され断面が露出する「B-2.面の切断」に分類できた。「C.転用」通常用いられない素材に交換される手法である。

A 遮蔽性の変化			A1. 素材の透明化 雲雀の住宅 壁の素材が透明化し開口部との関係が変化している。
			A2. 部材の欠損 港北O 扉の下半分の欠損により、空間を仕切りつつも連続させ、両義的な性格を得ている
B 組成現し			B-1. 表面材の削除 節穴の家 本来は隠される断熱材が現しとして扱われている
			B-2. 面の切断 House d 壁の断面が見えている
C 転用			富塚の天井 農業用メッシュが天井材として使用されている

4-3-2 「慣習的相対関係からの逸脱」

「D.類似」は異なるエレメント同士の性質が類似することである。異なるエレメントが似た性質を持つ「D-1.近似」と、全く同形の要素が異なるエレメントとして解釈される「D-2.合同」に分類した。「E.組成要素の重合」は複数のエレメントが一体化し、複数の意味や機能を持つ手法である。異なるエレメント同士が組成要素を共有する「E-1.共有」と、無関係なエレメント同士が貫入する「E-2.貫入」に分類した。「F.接続関係のずれ」は機能的、意味的に強い関連のあるエレメント同士の接続関係がずれる手法である。床などの平面同士の接続がずれる「F-1.横面ずれ」と、壁に対する開口部のような、内包されているエレメントが分離する「F-2.内包要素の分離」に分類した。「G.干渉」はあるエレメントに対し、他のエレメントが接したり、重なったりすることで、機能が損なわれる手法であ

4-2 作品分析

作品分析を行い表2を得た。エレメントに対する操作、機能、意味の変化などを統合し、「逸脱の手法」として、16の手法を得た。「慣習的性質からの逸脱」の手法として、「A.遮蔽性の変化」、「B.組成現し」、「C.転用」、「慣習的相対関係からの逸脱」から「性質」に関わる手法として、「D.類似」、「位置」に関する手法として、「E.組成要素の重合」、「F.接続関係のずれ」、「G.干

渉」、複合的な手法として「H.組成要素の連続」、「I.関係性の転置」の2手法、「慣習的全体性からの逸脱」から「性質」にかかわる手法として、「J.新旧対比」、「K.抽象度の対比」の2手法、「位置」に関する手法として「L.関係性の転置」、「M.基準要素の変化」の2手法、複合的な手法として、「N.内部化・外部化」、「O.境界の曖昧化」、「P.規則性の変化」の3手法を抽出した。

る。開口部に対して遮蔽性のある要素が重なる「G-1.透過障害」と、床に対して梁などが重なる「G-1.移動障害」に分類した。「H.組成要素の連続」は複数のエレメントが一体化し、連続的に捉えられる手法で。複数の異なるエレメントの面が連続する「H-1.複数要素の連続」と、一つの部材が場所により異なるエレメントとして解釈される「H-2.単一部材の読み替え」に分類した。「I.関係性の転置」は複数のエレメント同士の関係が様々に解釈できる手法で、複数のエレメントが一つのエレメントとして見立てられる「I-1.見立て」、ある複数のエレメントの構成形式が、他の複数のエレメントと同一の構成形式をとる「I-2.構成形式の参照」、複数のエレメントを互いに読み替えることができる「I-3.エレメントの読み替え」に分類した。

D 類似			D-1. 近似 チヶ崎の家 梁が壁と開口部の構成を取っている
			D-2. 合同 白楽の住居 階段と棚が同じ組成を取っている
E 組成要素の重合			E-1. 共有 伊丹の住居 複数の家具が階段として解釈されている
			E-2. 貫入 織の家 家具が開口部をまたいでいる
F 接続関係のずれ			F-1. 横面ずれ コートハウス 階段の経路上にない床が接続している
			F-2. 内包要素の分離 4n 開口部が壁の外に飛び出している
G 干渉			G-1. 透過障害 Nの住宅地の住宅 開口部に対し、床と柱が干渉している
			G-2. 移動障害 リブハウス 基礎梁が床に干渉している

H 組成要素の連続			H-1. 複数要素の連続 屏風ヶ浦の家 床と壁が連続し、境界が曖昧になっている
			H-2. H単一部材の読み替え 屋根裏の家 一つの部材が床と接する部分では壁、接しない部分では梁と解釈される。
I 関係性の転置			I-1. 見立て House 0 内面壁が削除され、空間が組成内のように扱われている
			I-2. 構成形式の参照 バルコニーハウス 開口部⇄床の関係性が開口部⇄床（テラス）の関係性になっている
			I-3. エレメントの読み替え 広島の小屋 基礎⇄床、床⇄床、床⇄机の関係が転置している

4-3-3 「慣習的全体性からの逸脱」

「J.新旧対比」は古い要素と新しい要素が対比されることで、見慣れた古い要素が見慣れないものとなる手法である。「K.抽象度の対比」は具象的な要素と抽象的な要素を対比させることにより、見慣れた要素が見慣れないものとなる手法で、敷地周辺のコンテクストを取り入れる際に有効な手法であると言える。「L.関係性の転置」は建築の全体におけるエレメントの位置が、通常的位置からずれる手法である。「M.基準要素の変化」は他のエレメントの位置を規定するようなエレメントが移動することにより、全体の位置関係が変化する手法である。また内外におけるスケール感に対比を与える。「N.内部化・外部化」は外部的な要素が内部に使用される「N-1.内部化」と、内部的な要素が外部に使用される「N-2.外部化」に分類した。「O.境界の曖昧化」は実際の境界とエレメントが示す境界が一致しない「O-1.境界のずれ」、内外を分けるエレメントが実際には内外を分けていない「O-2.内部的外部」に分類した。「P.規則性の変化」は、反復する同一のエレメントが異なる意味合いを持つ「P-1.反復性からの逸脱」、無関係なエレメント同士が規則的に並置される「P-2.規則化」、慣習的なエレメント同士に規則性が見出せない「P-3.不規則化」に分類した。一つ目は同一の要素が反復することへの期待から生じる逸脱である。二つ目は何らかの規則性を認識することにより、無関係なものが関係付けられ、見慣れないものとなる手法である。三つ目は二つ目とは逆に慣習的に、規則性を持って配置されるはずのエレメントに規則性や構造が読み取れない状況を生む手法である。

J 新旧の対比			Crossing Wall House 既存建物に新規壁を挿入することにより、既存建物が見慣れないものとなっている
K 抽象度の対比			庭路地の家 抽象的な壁面に対し、具象的な屋根瓦が図となって、見慣れないものとなっている
L 関係性の転置			三層に住む 通常、敷地上にあるべきブロック塀が2、3階に位置している
M 基準要素の変化			リビングブル 基準となる床が基礎のいちに下がることによって、全体の位置関係が変化している
N 内部化・外部化			N-1. 内部化 Hat house 通常外部に位置するべきブロック塀が、内壁として使用されている
			N-2. 外部化 あきらのシルバーハウス 内部的な要素であるカーテンが外部に使用されている。
O 境界の曖昧化			O-1. 境界のずれ Nの住宅地の住宅 開口部に対し、床と柱が干渉している
			O-2. 内部的外部 園 建物部と連続し、建具の入った開口部を持つ、外壁的な壁が内外を作っていない
P 規則性の変化			P-1. 反復性からの逸脱 ウィラ・ボタジエ 反復するハイサイドライトのうち一つが内部空間を作っていない
			P-2. 規則化 グリッド 柱、木、サッシュ、ポスト、電柱がグリッド状に配されている
			P-3. 不規則化 桃山ハウス 見慣れた要素が離散的に配置され、構造が見出せない

5 設計提案

5-1 設計プロセス

本章では、前章までの分析、考察を元に住宅の設計提案を行う。設計プロセスは、敷地周辺の外在的条件と住宅に内在する条件をの整理を行い、ゾーニング、ボリューム計画、諸室の配置、得たい空間の性質等を設定し、「手法の有用性」を参照した対応を行う。まず要件に対して適切な手法により、エレメントを敷地に配置する。次に配置されたエレメントと、ボリューム計画、諸室の配置等を比較しながら、それぞれのエレメントの接合を行い、空間を構成する。得られた空間を読み取りながら、住宅に必要な諸機能、動線の設定を行い、接合を調整する。以上のプロセスを繰り返しスタディすることにより、建築の全体形を得る。

5-2 設計提案

親世帯二人と子世帯三人の二世帯住宅の設計を行う。敷地は地方都市郊外の住宅地とした。敷地の南東面には交通量の比較的多い道路、南西面には道路を挟んで商店街が面し、周辺には造成時に建設されたと思われる平屋の住宅が現在も残っている。

敷地周辺環境の外在的条件の整理と内在的条件の整理を行い、ゾーニングとボリューム計画等を行なった。各手法を場所により組み合わせることにより、繰り返しスタディを行った。以上の過程において、エレメント同士の関係性に着目することにより、新たに逸脱の手法を適用することができるエレメントの組み合わせを見つけ出すことができた。この過程を繰り返すことにより、慣習性から逸脱による効果を全体に適用した建築空間を獲得した。



組成が現されたファサード
周辺の住宅にスケール感を習いながら壁、開口部などの操作により慣習性から逸脱した外観を持つ。



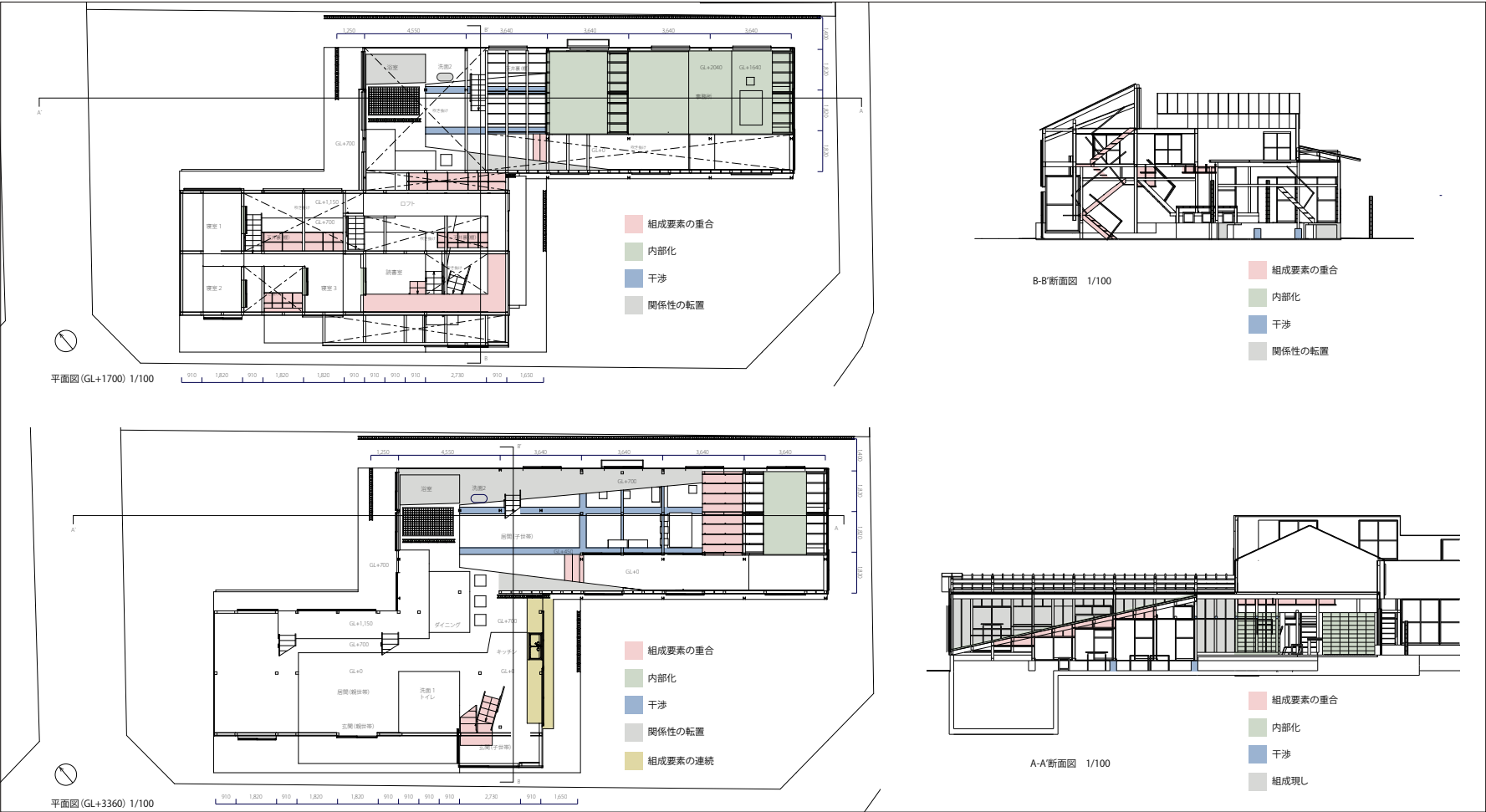
梁・壁と干渉する開口
開口を梁と床に干渉させることによって、階数を曖昧にし、周囲のスケール感と調整している。

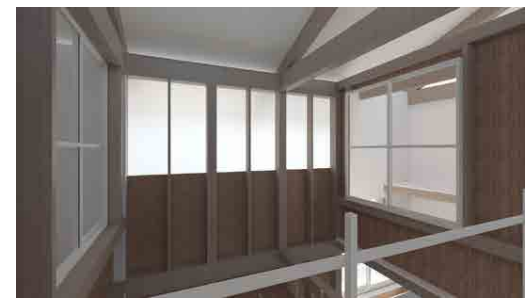


組成が現しになった外壁
外壁を透明化し簡素な仕上げとすることで、完成後の改変を容易にしている。



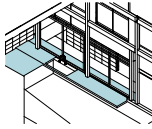
開口部から覗く屋根
開口部から内部化された屋根が見えることにより、通りを歩く人に視線をオフィス空間に集める。





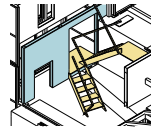
連続する基礎とキッチン

基礎の上面とキッチンシンクを連続させることにより、内外の連続感が生まれ、庭でのアクティビティを喚起する。



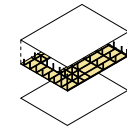
開口と重合する階段・欠損した壁

開口と階段が貫入し階段使用時に空間的な変化を与えている。欠損した壁によりアイレベルでプライバシーを守りながら、空間的な広がりを持たせている。



天井と棚の重合・欠損した壁

天井が棚として使用することができる。欠損した壁によりアイレベルでプライバシーを守りながら、空間的な広がりを持たせている。



組成が現しとなった吹き抜け

表面材を削除した壁で囲むことによって、空間を組成内に見立てている。壁の透明化によって採光を得ている。

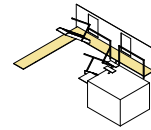


内部化した窓・床・壁と干渉する窓

窓を室内空間に設け、吹き抜けを介して重なることにより内外の暖昧な空間を作り出している。干渉した窓は内部では地窓のように扱われる。

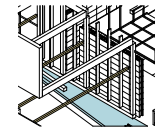
重合する階段・机・床

読書室の机を屋上に上る階段と重合させることにより、静的な活動と動的な活動が共存する空間が作り出されている。



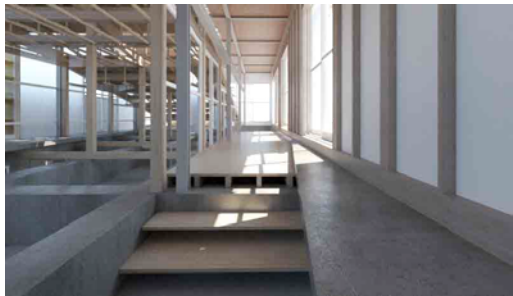
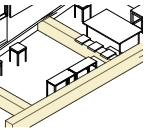
基礎・床・机の転置、梁の干渉

梁の上面、机と転置した基礎の上面が階段と重合することにより、多義的な意味合いを帯びている。



干渉する基礎梁、天井・土台

床に梁土台・を干渉させ、広い空間に領域性を与えている。また椅子としての機能が付加されている。天井が下がることにより床に干渉するが、棚として利用できる。



階段・基礎・机の重合

梁の上面、机と転置した基礎の上面が階段と重合することにより、多義的な意味合いを帯びている。

内部化した屋根・窓

屋根、窓を室内空間に設けることにより、内外の暖昧な空間を作り出している。

棚と重合する天井

天井が手に届く高さまで下がることにより棚として利用することができる。

連続する屋根と床

室内化した屋根の一部を床として用いることにより、リビング空間とは分離したオフィス空間を作り出した。